

## 土橋八千太師を憶う

神 田 茂

元上智大学総長土橋八千太師は1965年3月11日98才の高齢を以て東京下落合の聖母病院で逝かれた。当時の天文関係の雑誌では全く記事を見なかったようで、昨秋になって上智大学教授として化学を教えられている南英一先生の記事により始めて訃報を知った。日本の天文学界の大先輩であるので、おくればせながら2周年をすぎたが、追悼の辞をのべさせて頂きたい。私は師には3~4回お目にかかった程度で、その御経歴についても業績についても極めて僅かばかりしか知らない。幸にして本年1月南先生から「土橋師の偉大さ」(「世紀」昭和40年5月中央公論社発行)という高橋憲一氏の御寄稿の複写を頂いた。それによって同師の略歴をのべ、天文学上の業績について私の知る処を補い、更に私の記憶に残る師から受けた印象をのべて見たいと思う。

一昨年3月13日教会で葬儀が行われ、府中に葬られた。師は慶応2年(1866)10月28日信濃国諏訪に生れ、明治7年小和田村小学校の修業証書があり、明治12年6月10日筑摩県から頂いた高島学校の卒業証書と優等賞状とがあるそうだ。諏訪の地は藤原咲平先生、河角広氏、河西慶彦氏、五味一明氏、古畑正秋氏、青木正博氏等を産み、三沢勝衡先生の教えられた処である。高島学校は今の高島小学校である。私は高橋氏の稿で始めて先生が諏訪の御出身であることを知った。明治15年頃この地方を巡回したフランス人宣教師についてカトリック教に入り、東京築地明石町の拉丁翼に入学し、漢字とラテン語とを学ぶ。そこで中国上海にイエズス会の学校があるを知り、明治19年徐家匯ジカウエイのヨハネ学院に入学した。そこに6年間哲学、数学、物理学を修め特に道徳学を学んだ。明治25年から3年間徐家匯气象台で気象学と数学を学んだ。28年から1年間ルソンのマニラ气象台で、気象学と星学とを研究した。29年ヨーロッパに渡り、2年間ジェルシー島で、次に5年間パリー大学で数学、力学、天文学を学び、36年イギリスに渡り道徳学を研究した。37年再び上海に帰り、その後6年間余山(ゾーサー)天文台副台長、震旦大学教授をつとめ、25年ぶりに明治44年9月日本へ帰国した。その後上智大学教授となり、3代目の総長の役をつとめ、上智大学に起居せられた。

以上高橋氏の記された処によったが、師が天文月報に執筆されたのは、第1巻(明治41年)に「余山天文台」(中国在留当時)、第5巻(大正元年)に「干支速算表及

週曜日速算表」「所謂火星の溝渠は実象か将幻象か」(この2篇には「リサンジェー エス シャンス マテマテク」と肩書してあり、後者は明治45年4月の日本天文学会での講演である。)[「ハンリー・ポアンカレー氏小伝」、第9巻(大正5年)に「晶鏡(レンズ)磨成法」(第5巻と第9巻は帰国後)が発表されている。又中国滞在中の御仕事として、儀象考成による中国恒星図の作成は、上田博士の「石氏星経の研究」の付録その他で中国天文学史研究者に利用されているものである。

私はこの土橋師の御仕事について詳しい事を知らなかったもので、今回京都の藪内博士に御尋ねした処、土橋師が協力された星表は現在も御手許にあるそうで、乾隆9年(1744)の観測を収録した欽定儀象考成の材料をもとに、歳差の補正を行い、1875年の分点に直し、西洋名を決定したもので、巻頭に3枚の星図があるとのことである。手許にあるものは日本で製本したもので、発行所、年次は抜けている。書名は *Catalogue d'étoiles fixes observées à Pé-kin sous l'empereur K'ienlong* (乾隆)とあり、最初に Stanislas Chevalier 神父の署名入りの文があり、その中に土橋師による協力のことがかかれており、日本に帰国された頃出版されたいとのことです。この星表については「東方学報」京都第7冊(1936)の藪内博士「宋代の星宿」中に徐家匯天文台よりの出版物として紹介され、詳しい検討が行われている。

私は上智大学に師を訪れたことが2回あった。第1回は昭和7年(1932)「東京天文台報」創刊のときで、その英文標題 Tokyo Astronomical Observatory Report は土橋師によって訳して頂いた。第2回は、昭和30年(1955)頃で、上智大学図書館で隕石の文献を見せて頂くためであった。その時は図書館担当のフランス人に御親切に御紹介下さった。その時には既に総長の職を退いておられたと思うが、同大学内に住っておられた。私の受けた印象は極めて穏やかな親切な方であった。

又私の「年代対照便覧」を元にして「邦曆西曆対照表」というものを作られ、1952年に上智大学から出版された。その前後にも数回お手紙を頂いたと記憶する。

天文学の長老の訃報について、大へん迂闊ではあったが、おくればせながら記して追悼の辞とする。

(昭和42年6月)